

ユダヤ人のユーモア，ホロコーストのユーモア

佐 川 和 茂

はしがき

ユダヤ人たちは紀元70年、ローマ軍によって彼らの信仰の象徴である神殿を破壊されて以来、1948年のイスラエル建国に至るまで、長期に及ぶ流浪(ディアスポラ)を強いられた。今日でも、イスラエル国籍を持たないユダヤ人の場合は、ディアスポラのユダヤ人であるとも言えよう。流浪の期間中、彼らは常に少数民族として諸国に分散して暮らし、そこで一時的に迎え入れられ商売に重宝がられることがあっても、いったん寄留先の政治経済が悪化すれば、その責任を転嫁され迫害され追放されることが常であった。しかし、彼らは数々の艱難辛苦を乗り越えながら、彼らを迫害した国家や民族が減んだ後でも、存続して今日に至り、なお優秀な人材を諸分野に輩出し続けている。たとえば、シーセル・ロスは『ユダヤ人の歴史』において言う。「今日、ユダヤ民族はその中に、過去のあらゆる危機を乗り越え、古代の最も強力な帝国の中でただひとつ生き残ることを可能にした力と忍耐力とを今もなお持っている」(302)と。彼らが存続してきた事実、そして民族のアイデンティティを維持してきた達成は、驚異であり神秘的ですらある。いったい何が彼らの存続やその優秀さに寄与してきたのであろうか。

まず、その要因として、流浪の中で民族精神の核を形成した聖書やその注解タルムードが挙げられよう。聖書を日々学び、生きる英知を汲み取ることは彼らの習慣となった。また、国を失った民族にとって「移動する故国」の役割を果たしたタルムードは、彼らを精神的に支え、さらにタルムードにおける絶えざる注解の積み重ねは、彼らの探求精神を研ぎ澄ました。諸国の文盲率が高

かった時代に、宗教を中心に栄えたユダヤ教育は、迫害ですら奪うことのできない知的財産を形成し、彼らの発展を支えたのである。また、聖書に盛られた613と言われる戒律を守ろうとする一例として、どこに住もうとも土曜の安息日を遵守したことは、世界に散らばった民族の結束を強め、たとえ週一回でも労働を離れ安息の日を持ったことは、彼らに悲惨を乗り越えて生きる力を与えた。さらに、迫害に対抗するために相互扶助や慈善精神を高めたことも、彼らの存続に寄与したことであろう。

このようにユダヤ人が存続を求めて奮闘してきた過程で、もうひとつ忘れてならないものがある。それは、彼らが流浪の苦難の中で培ったユーモア精神である。激変する流浪社会を生きるに当たって、心の支えとして聖典を学び続けることが重要であったと同時に、理想と現実との乖離を埋め合わせるために、いわばクッションの役割を果たすユーモアが必要であった。すなわち、神によって選ばれた民でありながら、しばしば社会の末端で呻吟する矛盾の中で、彼らはユーモアによってこうした理想と現実との狭間にやんわりと均衡を求め、危険な活火山のふもとで暮らすような状態にあっても、プラス思考を持って生き延びてきたのである。まさに、流浪の苦難がユダヤ人のユーモアを育んだと言える。

そこで以下、迫害に耐える力を彼らに与え、その精神を柔軟にし、彼らの発展に寄与したと思えるユダヤ人のユーモアを味わっていききたい。より具体的には、少数民族として東欧諸国で不安定な生活を余儀なくされた状況より生じた自らをあざけるユーモア、理想と現実のギャップを埋めるために必要なユーモア、流浪の中で隣人との共生を目指すユーモア、ホロコーストのユーモア、そしてイディッシュ文学の影響を受けたユダヤ系アメリカ作家のユーモアなど、ユダヤ人の存続に寄与したと思えるユーモアを探っていききたい。

1 自らをあざけるユーモア

ユダヤ人のユーモアには、過酷な歴史を生きてきた自らの不遇や失敗を笑うものが多い。自らをあざけることで自己を客観視し、そこにささやかでも精神

的な余裕を得て、厳しい状況においても正気や存続を求めようとしたのである。長期の流浪の中で、彼らは武器を取って戦う状況になかったのであり、その代わりにユーモアが精神的な武器となったわけである。これはまた、東欧で多数派を占めるキリスト教徒の狭間で、少数民族として不安定な生活を余儀なくされたことから生じた独特のユーモアであった。

すなわち、神によって選ばれた民でありながら、現実には、たとえば19世紀のロシアやポーランドなどで見られたように、政治的・経済的に虐げられ、社会の底辺で呻吟する境遇であった。その矛盾を皮肉なイディッシュ語のことわざがある。「仮に神がこの世に住んでおられるとしたら、人々は(腹いせに)神の窓を壊すであろう」(*Yiddish Proverbs* 39)。こうした皮肉な落差を埋め合わせるために、「彼らは常に自らを笑う態勢ができている...それは自らに関するユーモアである」(*Bright Book of Life* 138)と、ユダヤ系文芸批評家アルフレッド・ケイジンは言う。また、アルベール・メンミも『イスラエルの神話』において述べている。「ユダヤ人のユーモアは...自己攻撃の成分をたっぷり含んでいる」(55)。「惨めな成果しか挙げられないことが多いのに、こんなに知恵を絞り、骨を折らねばならない...自分自身を槍玉にあげる」(同上56)。「ユダヤ人のユーモアは、まずユダヤ人の状況の否定性の表現であり、そして、この否定性に対するユダヤ人の苛立ちの表現である」(同上57)。ポーランドやロシアなどで最下層民であった人々が、同時に神のお告げを伝達する選民でもあったという、この物質と精神との極端な落差を、皮肉を込めた自己をあざけるユーモアによって、ユダヤ人は和らげようとしたのである。

再びことわざを引用するならば、「弱いから転ぶのではない。強いと錯覚しているから転ぶのだ」(*Yiddish Proverbs* 93)と言うが、ユダヤ人は、自らをあざけるユーモアによって自己の錯覚を戒め、歩む道を注意深く求めたのであろう。少数民族であり異邦人である彼らは、自らに降りかかる諸矛盾に関して外部に怒りを表明して対抗できる状況になく、代わりに自らをあざけるユーモアを潤滑油として、たとえ転ばざるを得ない際にも、その衝撃をできるだけ小さく抑えようとしたのである。

アンドレ・シーゲフリードは『ユダヤの民と宗教』の中で、「イスラエル民族の歩んだ4千年の道をかえりみる時に、この民族にはじめて託された本質的なものは、現在に至るまで失われていない」(164)と結論付けている。唯一絶対の神を信仰し、生活全体を支配する戒律を遵守し、不滅の救世主の信仰を抱き、現世における神の国の実現を肯定するという意味で、彼らは根強い楽天主義を貫き、同化による民族の危機にも対処してきたのである。

長い流浪生活を送りながら、ユダヤ人はいつの日か救世主が現れ、彼らを約束の地に連れ戻してくれると信じて生きたのである。ただし、こうした希望と現実の大差を象徴する、ノーベル賞作家ソール・ペローの『犠牲者』(*The Victim*)にも引用された有名な話がある。ある辺鄙なユダヤ村落において、メシア到来の際、村人にそのことを知らせる見張り役として、一人のこじきが採用されたという。そのこじきが給料の低さに不平を漏らしたとき、次の答えが返ってきた。「給料は確かに安いが、とても長続きする仕事だよ」。

上記の話に窺えるように、村落の賢人たちの希望がおろかに見え、たとえば、ノーベル賞作家アイザック・バシエヴィス・シンガーの描く愚者ギンベル(*Gimpel the Fool and Other Stories*)のように、単純な人間のおろかさが一種の抜け目なさを帯びてくるのである。対照的に、タルムード学習で鍛えた知性を過度に働かせ、些事を複雑化してしまうユダヤ人の行動を笑うシンガー作『ヘルムのあんぼんたん』(*The Fools of Chelm and Their History*)も自己をあざけるユーモアとしてよく知られている。

2 シュレミールのユーモア

イディッシュ語で「不運な人」を意味するシュレミールは、まさにホロコーストを含めて常に迫害を受けてきたユダヤ人を象徴する人物である。愚者ギンベルのように常についていない人間が、耐えざる迫害に悩まされ不運な生涯を送った東欧ユダヤ人の象徴となり、ユダヤ人のユーモアを表わす中心人物のひとつになるのである。シュレミールのユーモアは、自らでは統制不可能な社会状況の中で、ひとつの自己防衛として機能することになる。「シュレミールは常

についていない人であり」(*The Comic Imagination in American Literature* 331),「成功の機会にほとんど恵まれない社会では、失敗をユーモアで受け止めることが真の重要性を帯びてくるのである」(*The Schlemiel as Metaphor* 10)。また、「社会の競争が激化するにつれて、失敗談は周囲にどことなく安堵感を与える」(同上 158)が、「そうした悲惨な宇宙での人生は、宇宙規模の冗談にはかならず、したがって、人がシュレミールの地位に格下げされることは避けられないのである」(*The Schlemiel Comes to America* 77)。

シュレミールの運命は、ロシアのユダヤ人強制居住区(ペイル地区)やヨーロッパ諸国のユダヤ人町(シュテトル)に押し込められて暮らした多くのユダヤ人が共有したものである。周囲の多数派民族によって政治的・経済的に多くの不利を押し付けられたペイル地区やシュテトルでは、いかに努力しても歴史的・社会的な環境のゆえに、その努力が実を結ぶことはまれであった。たとえば、そのことはイディッシュ文学の巨匠ショレム・アレイヘムの諸作品にも表されている。厳しい現実より脱却しようと夢を抱き、さまざまな企画を立てようとしても、牛乳屋テヴィエ(*Tevye's Daughters*)や、職を転々とするメナヘム・メンデル(*The Adventures of Menahem-Mendl*)や、先唱者の息子モッテル(*Adventures of Mottel the Cantor's Son*)のように、それが繰り返し失敗に終わるのである。不運な失敗を繰り返しつつそれをユーモアで受け止めようとする彼らシュレミールの姿は、時空を超え、よりよい人生の夢を求めようと奮闘する人間の切実な共感を呼ぶであろう。

すなわち、シュレミールとは何世紀にもわたる流浪の中より徐々に形成されてきた人間像である。たとえば、ロシア皇帝アレクサンドル二世の暗殺をきっかけに反ユダヤ主義の渦が沸き起こった1881年から1924年の間、200万もの東欧ユダヤ人が渡米したと言われるが、その中にはテヴィエ、メナヘム・メンデル、モッテルも含まれていたのである。渡米した彼らは、新旧世界の価値観の対立、宗教観の変容、同化の傾向などに直面していくことになる。

そうした東欧ユダヤ人の移住に関して、移民一世の作家エイブラハム・ケーハン¹⁾は、興味深い作品を残している。たとえば、短編「神に定められた結婚」

(“A Providential Match”)は、アメリカに渡ったシュレミールとロシアから呼び寄せた娘との皮肉な結婚話であり、「連れてこられた花婿」(“The Imported Bridegroom”)は新旧世界の対立と呼び寄せた花婿の退廃的な変貌を描く。いっぽう、500頁を超える大作『デイヴィッド・レヴィンスキーの出世』(*The Rise of David Levinsky*)は、ハウエルズ、ドライサー、フィッツジェラルドなどの成功の夢物語に移民体験を絡めたものであり、それは主人公の経済的な成功より、むしろ精神的な失望を強調する作品であることが、最初と最後に読み取れよう。

さらに1930年代、ナサニエル・ウェストは、大恐慌時代の絶望をシュレミールの人間像と絡めて描いたが、そこでは家族との絆を保つショレム・アレイヘムのシュレミールから変貌し、孤立した存在が印象付けられている。

いっぽう、1940年代より活躍したソール・ベローは、シュレミールの主人公たちに悲喜劇を通過させ、彼らを正しい思考や行動へと導こうとしている。彼の描く主人公たちは西欧の知性を持つと同時にユダヤの「古い道」に憧れ、多くの面でシュレミールであり、これは『ソール・ベローとの対話』(*Conversations with Saul Bellow*)で強調されるベローのユーモア精神と関わるものである。

また、1950年代にベローやバーナード・マラマッドは、シュレミール像をゲットーの雰囲気より出して、アメリカ社会へと浸透させていく。その年代にユダヤ系アメリカ作家たちは、広くアメリカ社会へ参入したのである。そこでは、『バーナード・マラマッドとの対話』(*Conversations with Bernard Malamud*)で述べられる「万人はユダヤ人なり」という作家の趣旨を受容する土壤が次第にできていたのである。

やがて1970年代にベローは、『ハーツォグ』(*Herzog*)や『サムラー氏の惑星』(*Mr. Sammler's Planet*)に見られるように、主人公の思考過程を作品の主流とする独特の境地を見出し、物事の根源にさかのぼって熟考する古のユダヤ人の信念の中に、救済への糸口を見出そうとする。その過程で、混沌とした多要素を体系化しようともがくハーツォグは、『ソール・ベローとの対話』にも

言及される、もっとも複雑で興味深いアメリカのシュレミールである。

マラマッドの場合、『新しい生活』(*A New Life*)や『フィデルマンの絵』(*Pictures of Fidelman*)には、シュレミールのユーモアがあふれている。また、『修理屋』(*The Fixer*)において、シュレミールの要素を持つ素朴な主人公は、同胞のために苦難に耐え抜き、政治的にも目覚めていく。

ベローやマラマッドなど限られた範囲で眺めた場合でも、東欧のシュレミールが先祖となり、東欧よりアメリカにいたるシュレミールの系譜が認められよう。ベローやマラマッドの描く、高い理想を持つが現実には失敗の多い人物は、言葉の才能が豊かであり、活力にあふれて旺盛に飛び回り、混交の状況を生き抜いていく。彼らは、アンチ・ヒーローの時代のヒーローであると言えよう。

3 イディッシュ文学のユーモア

ハウとグリーンバーグの『イディッシュ物語の宝庫』(*A Treasury of Yiddish Stories*)にも述べられるように、ロシア、ポーランド、ルーマニアなどに生きたユダヤ人たちは、土地を持たず、行商や手仕事や機知によって暮らし、極貧の生活を強いられ、彼らに対する組織的な虐殺(ポグロム)の脅威にさらされていた。孤立・極貧・暴力によって疲弊したシュテトルを活気付ける意図を持って、19世紀にメンデレ・モイヘル・スフォリム、I.L. ペレツ、ショレム・アレイヘムを「古典的な3作家」とするイディッシュ文学は興ったのである。それは困難な状況で培った文化や生き方、宗教、習慣、祝祭、夢と現実との間を埋めるユーモアなどを描く文学である。

この文学で用いられるイディッシュ語は、元来ドイツ語とヘブライ語の混成語であり、さらに流浪の中でいずれの言語よりも吸収して語彙を豊かにしつつ、しかもそのアイデンティティを失うことがなかった。まさにイディッシュ語はヘブライ語とともに、ユダヤ人の奇跡的な存続そのものを反映していると言えよう。

ここでのユーモアとは前述したように、選民でありながら社会の最下層で呻吟した東欧のユダヤ人が防衛手段としてはぐくんだものである。それは冗談や

機知や風刺を含み、ユダヤ人と神との論争もユーモアに含まれる。外部に対して無力であるので、ユーモアは自己に対する批判となり、ユダヤ人の生活を悲劇化している社会への批評ともなる。

そこでイディッシュ文学は、自らを支える政治・経済機構を持たないユダヤ人にとって、流浪の終結とユダヤ民族の再統合を切望し、希望のないところに希望を生み出す文学であった。したがって、イディッシュ文学は個性的な人間より、民族の典型的な人物に焦点を合わせていくことになる。

また、イディッシュ文学は人生の悲惨を描きつつも、貧しく虐げられたものや孤児に対する暖かい愛を失うことがなかった。無力な人々の徳、虐げられた人々の聖なる面が、富や権力を求めてもはかない社会状況より生まれ、卑小な人(リトル・マン)が繰り返し登場し、それから聖なる愚者や放浪者という人間像が派生する。さらに、幼くして卑小な人の苦難を背負った早熟の子供が登場してくる。

イディッシュ文化の中心は、ヒトラー侵略にいたるまでポーランドであった。いっぽう、ロシアではスターリンの粛清によって、1940年代までにほとんどのイディッシュ語作家が消えうせた。その後、アメリカがニューヨークを中心としてイディッシュ文化の最後の砦となり、ポーランドから移住したアイザック・バシェヴィス・シンガーなどが活躍するのである。

イディッシュ文学の「古典的な3作家」を振り返るならば、その一人メンデレ・モイヘル・スフォリム(書籍行商人メンデレ)は、啓蒙運動(ハスカラー)の影響を受け、何世紀もの孤立から生じる無気力状態よりユダヤ人を引き上げ、その精神生活を浄化する目的で、風刺と教訓の入り混じった中編小説を発表した。彼は、聖典、物語本、お守りなどを行商しながら国中をめぐる見聞を広め、富者が貧者を食い物にする例、シュレミール、霞を食べて生きるほど貧しい人々、コレラ、こじき、汚濁など、シュテトルの内幕を現実的に描き、それを批判した(*Fishke the Lame*)。また、こじきでありながら陽気であり、ほとんど無謀とも思える信仰を維持し、無一文でありながらユーモアを忘れない人々を登場させている(*The Brief Travels of Benjamin the Third*)。メンデレ

は、アイザック・バシェヴィス・シンガーが『アメリカで迷う』(*Lost in America* 109)で言及するように、聖人にあふれた極楽ではなく、シュテトルの赤裸々な現実を描いたのである。

次に、都市の洗練された読者を対象とした I. L. ペレッツは、シュテトルの伝統的な思想と神秘主義やハシディズムの幻想を交えて独特の物語を編んだ(*Selected Stories*)。ペレッツのよく知られた「沈黙の人ボンチャ」(“Bontsha the Silent”)は、誰にも知られず生きて、影のように世を去った。その墓も残らない。彼は不平ひとつ漏らさずに苦難の人生を全うしたのである。虚偽の現世で理解されなかった彼の力は、真の世界、来世で報われていく。この内容は、ペレッツを「イディッシュ文化の創始者であり精神的な指導者」(*Lost in America* 246)であったと評価するアイザック・バシェヴィス・シンガーの「愚者ギンベル」へと発展していく。

いっぽう、イディッシュ語の挨拶を筆名としたショレム・アレイヘムは、牛乳屋テヴィエを激動期のユダヤ人として設定し、家族の変容と存続の主題を追及した。作者に向かって主人公が身の上を語る形式において、テヴィエは神と一対一で対話をし、辛いときにさえユーモアを忘れない。たとえば、次女ホーデルがロシア革命に参加しシベリア送りとなった恋人を追っていく場面では、彼の悲痛な気持ちがユーモアににじみ出る。「さて、もっと陽気な話でもしましょうか。ねえ、オデッサのコレラはどうになりましたかね」(*Tevye's Daughters* 68)。彼はわが身に次々と降りかかる不幸を神の意思として、皮肉を込めたユーモアで受け止めていく。不安定な危険地帯で、辛くもユダヤの伝統にすがって足場を保ち、人間的な調べを奏でて生きようとする。愛と哀歎の物語で彼はしきりと冗談を飛ばし、独学で学んだ聖典をしばしば誤って引用することで、聖典に通じた読者の笑いを誘う。外部からはポグロムが、内部からは世代間の相克が襲い来る激動期を生きたテヴィエとその家族の物語は、シュテトルの多くの家庭で繰り返され、アメリカへ持ち越されていくのである。

テヴィエの親戚であり霞を食べて生きるような主人公は、『メナヘム・メンデルの冒険』において、神への信頼を失うことなく楽観的である。夢を追求め、

転職を繰り返すが，不運にもすべてに失敗していく。彼の妻は，夫との間で交わされる手紙の中で，日常生活の悲惨を述べ，彼女や家庭を顧みない夫に不満を繰り返しても，苦勞に耐えて誠実な態度を貫く。

激変するシュテトルは，テヴィエ物語のみでなく，ユーモアにあふれ奇想天外な『カスリルフカ内幕』(*Inside Kasrilevke*)にも表されている。そこでユダヤ人は富者も貧者も大差なく，常に苦難を抱えながらも，夢を見て生きる。彼らの物語を導く「詩神」(140)は，同様に貧しいけれども，ユーモアがあり，涙を嫌うのである。

作者が死の間際まで書き続けた『先唱者の息子モツテルの冒険』では，ロシアの貧しいユダヤ村落で生まれ，幼いころ父を亡くしたソプラノの声を持つ少年が，残された家族や親族とともにヨーロッパ諸都市を流浪し，三等船室の長旅で渡米し，数々の逆境をユーモアで乗り切っていく。シュレミールは逆境において奮闘し，多くの失敗にもかかわらず，自らを笑いながら，絶望に踏み碎かれることを避けるのである。

4 移民のユーモア

前述したように，1880年代よりポーランド，ロシア，オーストリアなどからポグロムを逃れて大勢のユダヤ移民が渡米する。彼らは，約束の地アメリカに抱いた理想とそこで遭遇した現実とのギャップを埋めるために，ユーモアが必要であった。理論的には万人は平等である国家において，現実には社会的・経済的・人種的な格差が存在していた。また，皮肉なことに，一日16～18時間もの労働を彼らに課した搾取工場を経営していたのは，先着のドイツ系ユダヤ人であった。旧世界とは異なる状況に直面したシュレミールは，皮肉なユーモアをかみ締めながら，新世界アメリカに歩を刻んでいく。

たとえば，『イディッシュ語の愉悅』(*The Joys of Yiddish*)や『イディッシュ語万歳』(*Hooray for Yiddish!*)の著者レオ・ロステンが著した『ハイマン・カプランの教育』(*The Education of Hyman Kaplan*)を眺めてみよう。舞台は，新来移民が学ぶ夜間学校の初級英語クラスである。搾取工場で衣服の裁断士

として働く40代の主人公の「若き日の大志とは、外科医(surgeon)になることであった」(11)。しかし、それを「軍曹(sergeant)」と混同し、さらに「ジョージ(George)・ワシントン」をユダヤ聖書の「士師(Judge)」と間違え、「エイブラハム・リンカーン」をユダヤ名「エイブラム・リンコーヘン」(79)と呼び、「輸血(blood transfusions)」を「混乱(confusions)」(83)と混同してしまう。ただし、主人公は自らの失敗を笑うことによって、悲劇的な結果に陥ることを回避しているのである。

また、『ハイマン・カプランの帰還』(*The Return of Hyman Kaplan*)では、ロシアのキエフで生まれた主人公は、迫害を逃れて10日間の苦しい船旅の後、アメリカに到着し、大志を抱いて学んでいる。夜間学校では多国籍の生徒たちが、異なる移民感情、独特の英語、種々の職業的雰囲気をかもし出す中で、それをひときわ盛り上げる人物が、ドン・キホーテ的なハイマン・カプランである。彼は英語学習との格闘において、いくたび蔑まれ、敗戦の塵にまみれようとくじけず、届かぬ星を追っていく。しかし彼は、アメリカ生まれの人々が当然視する「常識」を問い直し、その過程でアメリカを発見していくのである。

ハイマン・カプラン同様、移民一世であるメアリー・アンティンの父親は、約束の地(the promised land)に単身到着後、苦節3年、家族を呼び寄せるまで刻苦勉励するものの、身についた旧世界の慣習や生まれながらの性格やラビ家系出身者の虚弱体質が災いして失敗を繰り返す。どうやら英語を理解し話せるようになって、それを書く段階にはいたらなかった。

その点、同じく移民一世であるハーツォグの父親もユーモアにあふれる失敗続きである。「1913年にケベックのヴァリフィールド近郊に土地を買ったが、農業で失敗。それから町に出て、パン屋で失敗。乾物屋で失敗。仲買業者で失敗。誰もが景気よかった戦時中、袋製造業で失敗。廃品回収業で失敗。それから結婚仲介人になったが、それにも失敗」(137)。

5 厳しい状況下でのプラス思考

ユダヤ人の迫害の歴史を振り返れば、いかに負の要素が大きかったことであ

ろうか。それだけに何とかそれをプラスに転換しなければという、強い願望が芽生えてくることが想像できよう。精神の支えを無くして落ち込めば、身体的にも衰え、崩壊してしまうからである。こうして巨大なマイナスをプラスに転化していく悲願は、民族全体にも、またユダヤ人一人一人にもはぐくまれていったのである。これは、暗黒に一筋の光明を求めるテーマとも関わってくる。

たとえば、ホロコーストを生き延びた精神科医ヴィクトール・フランクルの場合も、強制収容所より解放された後の紆余曲折の中で、人生に意味を求める思想を築くことなしには生きていけなかった。その切望が、彼の思想体系を構築し、人の魂の治癒へと発展させ、ユーモアを重視させているのである。彼は『夜と霧』(*Man's Search for Meaning*)において言う。人間をもっぱら根絶政策の強制的対象とし、その最終目的の前に身体的な労働能力を徹底的に搾取する政策に対して、「ユーモアも自己維持の闘いにおける心の武器」(68)であったと。

実に、ユダヤ人のユーモアは、厳しい状況下におけるプラス思考を促す要素である。フランクルはまた『意味への意思』(*The Will to Meaning*)で説く。「避けがたい苦難のごとく、たとえ悲劇的・否定的な人生の局面でさえも、それを人としての達成に変えることができるのである。それは、人が逆境でいかなる態度を取るかにかかっているのである」(ix)。いっぽう、第二次大戦後、シベリアで8年間の抑留生活を送った石原吉郎は『望郷と海』の中で漏らす。「ユーモアとは、のっぴきならない状態の中ではじめて明らかになるものである。このユーモアの意味が本当に分かったとき、私たちは、この暗い生の重圧の中で『それでも生きているほうがいい』と、安堵してつぶやくことができるのだ」(230)。

フランクルと吉原の言葉は、ショレム・アレイヘムの『笑いと涙』(*Some Laughter, Some Tears*)にも具現化されている。そこでは、ロシア政府が扇動したポグロムにおいて親族7人を失ったユダヤ人が、「これでもまだましさ。換言すれば、もっとひどい状況もありえたのだよ」(240)と手紙に記す。ここでも筆舌に尽くしがたい悲劇に対して取る態度やその表現法が注目されよう。こ

れはさらにユダヤ人の次のことわざを連想させる。「ユダヤ人は片足を折れば、両足でなくてよかったと神に感謝し、両足を折れば首の骨でなくてよかったと神に感謝する」(『ユダヤを知る事典』183)。

ホロコースト生存者を両親に持つヘレン・エプスタインは『ホロコーストの子供たち』(*Children of the Holocaust*)において、大悲劇のトラウマを背負って生きる人間像を追求しているが、悲劇の中にも垣間見られるこっけいな面のみを表現することで精神的な支えを維持し、強制収容所を耐え抜いた人物の例(239)を挙げている。彼の息子は、そうした父親のユーモア感覚を受け継ぎ、イスラエルに移住し、ワイツマン研究所で働き、悲劇の再発に抵抗する精神を養っていくのである。

また、ソール・ベローは、『ユダヤ珠玉短編集』(*Great Jewish Short Stories*)の序文で言う。「われわれは歴史や文化を形成するわけではない。われわれは単にこの世に生まれてくるだけだ。しかもそれは自らの選択ではない。われわれは自らの状況において可能な手段を用いて人事を尽くす。われわれは見出すままに混交を受け入れねばならない。その不純を、その悲劇を、その希望を」。ベローの言葉には、清濁混交を受け入れ、ユーモアを忘れず、その中で小さな勝利を積み上げながら、希望を求めていく生き方が示唆されているではないか。

ユダヤ人は、他民族の中でもまれ、不利な条件下で生きなければならなかった少数民族の代表であろう。異文化の狭間で暮らすことは知的刺激に満ちていても、常に摩擦を伴うものであり、そこではユーモアや機知を働かせなければ、うまく生きていくことができない。

機知といえば、1930年代のベルリンで、歩行中のユダヤ人がナチ突撃隊員と接触したという。激怒した隊員は、「この豚野郎! (Swine!)」と怒鳴る。それに対してユダヤ人は、「エプスタイン (Epstein) と申します」と答えてお辞儀をする(*Encyclopedia of Jewish Humor* 199)。ユダヤ人が忌み嫌う豚を悪口雑言に用いた野蛮な隊員に対して、韻を踏む名前で応答し、自らのアイデンティティや礼節を守り、加えて自らへの衝撃を最小限に抑えたユダヤ人の機知である。

また、たまたま道で行き逢ったユダヤ人を、ロシア農民は殴りつけて溝に落とす。ところが立ち上がったユダヤ人は、にっこりとして、1ルーブルをお礼に差し出す。びっくりした農民に、「今日はユダヤ人の大切な祝日でして、この日に殴ってくれた人に1ルーブル差し上げる習慣なのです」と話す。農民が「それじゃ、もっと殴ってやろう」と言うのと、「いえ、私はそんな金持ちじゃありません。でも代わりにユダヤ人大富豪のお宅で試したらどうですか」と提案する。喜び勇んだ農民が、豪邸の呼び鈴を鳴らし、現れた主人を殴り倒す。驚いた主人は護衛を呼び、農民は袋叩きにされ、外に放り出されて、ののしる。「あのユダ公、ひでえ奴だ。俺を大切な祝祭を守りもしない邸に送りやがって」(*Encyclopedia of Jewish Humor* 53-4)。殴られた瞬間マイナスをプラスに転化したユダヤ人と、袋叩きに遭ってもなお悟りの無いロシア農民を対比したユーモアである。多くの修羅場をくぐり、絶えず非常時に備えているからこそ生まれたユダヤ人の機知である。

「征服された民族は機知に恵まれるものだ」(*Mr. Sammler's Planet* 98)。また、「束縛は反対するものをいやでも機知に富ませ、それは実に大きな利点となる」(『なんと美しい日曜日!』184)。そして、「生き延びるためには、条件はきわめて不利だが、行動の自由と思想の自由の何らかの領域、たとえどんなに小さな領域でも、自由の領域を切り開く必要がある」(『鍛えられた心』156)。ユーモアが時にはその助けになってくれるのである。

6 ホロコーストのユーモア

石原吉郎は『望郷と海』において記す。「なまはんかなベシミズムは人間を崩壊させるだけである。ここでは誰でも、一日だけの希望に頼り、目をつぶってオプティミストになるしかない。(収容所に特有の陰惨なユーモアは、このようなオプティミズムから生まれる)」(28)と。

いっぽう、収容所をくぐり抜けたホロコースト生存者より生まれたスティーヴ・リップマンは、ヒトラーの犠牲者が心の武器として用いたユーモアを収集し、20年以上にわたるその研究成果をまとめている。

収容所群島を体験した石原も示唆するように、それが存在するとは信じがたいことであるが、それはまさにホロコーストより生まれたユーモアなのである。ホロコーストのユーモアとは、神が人を絶望の奥底より救い上げるために授けた贈り物であろうか。それは抑圧と戦い、正気を維持し、内面の防衛機能を手放さないための精神的な武器である。われわれは、ホロコーストという背景を想像した上で、そのユーモアを味わい、ユーモアの背後に浮かび上がる現実を問うのである。

そのユーモアの対象とは、以下のものである。たとえば、ドイツ国民の状況や、ヒトラーがユダヤ人の血を引いていた可能性や、うそつきヒトラー、神格化されたヒトラー、殺人鬼ヒトラー、狂人ヒトラーなどを皮肉る内容である。スティーヴ・リップマンの『地獄の笑い』(*Laughter in Hell*) からいくつかの具体例を挙げよう。

ガンジーとヒトラーの違いとは何ぞや。インドでは万民のために一人の男が腹をすかせたが、ドイツでは一人の男のために万民が空腹に泣く(91)。

「ヒトラーが平和演説をしたから、じきに戦争がおっぱじまるだろう」とベルリン市民は浮かぬ顔(80)。

あるときヒトラーが精神病院を慰問。ふんぞり返って「我輩はあらゆる権力を掌握し、神同等の力を持つのであゝ」と演説。それを聴いた患者がつぶやく、「ああ、俺も最初はあんな風だったよ」(95)。

散歩中ヒトラー、ゲーリング、ゲッベルスは道に迷い、通りかかった農夫の荷馬車に乗せてもらおう。ヒトラー、ゲーリングは、「農夫よ、総統を荷馬車で運ぶとは何たる光栄であろうか」と語るが、農夫はからかわれていると思い、怒って言う、「お次は、そこのユダ公がゲッベルスだなんて言うんじゃないかならぬ」(54)。

キリスト教と国家社会主義との違いは何ぞや。キリスト教では一人の男が万民のために命を召されたが、国家社会主義では一人の男のために万民が死なねばならぬ」(91)。

戦時中、ドイツのプロパガンダは以下のとおり。一年目「われわれは勝っ

た」。2 年目「勝つだろう」。3 年目「勝たねばならない」。4 年目「負けるはずは無い」(81)。

ベルリン市民の生活状況はいかに。「ドイツ人が地下を，外国人が道路を，英国空軍が空を占拠している」(81)。

ヒトラー死して地獄に行き，ムッソリーニとヒロヒトに面会。そこで新たな3 国同盟を提唱するが，神の栄光の前に挫折す(93)。

いっぽう，ホロコーストの貴重な記録として日記が残されている。それは，ワルシャワ・ゲットーの日常，歴史家の詳述，ナチに抵抗した人々の行動，収容所の特別班がつづった恐怖，アンネ・フランクをはじめとした少年少女の文章などを記録している。その中にもユーモアを見出すことができるが，以下，3 つの例を挙げていく。

1942 年より 44 年にわたる 25 ヶ月間，アンネの家族，共同経営者の家族，そして歯科医の 8 人はアンネの父の事務所があったアムステルダム建物の屋根裏部屋に潜んで暮らす。アンネは，13 歳より 14 歳までの内面を打ち明ける日記の中で，狭い隠れ家で絶えず緊張して暮らす生活をつづる。物音を立てられず，外気も吸えず，遊ぶ楽しさも味わえない。閉じ込められている中で，人間関係も悪化していく。それでも外に見えるわずかな自然に慰めを見出し，美を求めて苦難に負けまいとし，しばしば逆境をユーモアで語る。

アンネは，戦争が人間性に与える影響や，戦争責任や罪の問題に深い洞察力を示し，人類のために働く希望を述べる。日記がドイツ秘密警察の目を逃れた奇跡を含め，『アンネの日記』はホロコースト文学への入門であり，ホロコーストに対する抵抗文学であり，また自己を主題とした青春文学である。隠れ家の環境，そして自らの運命を本能的に悟ったことが，日記の内容を濃密にしたのであろうか。アンネ自身はベルゲン＝ベルゼン収容所で短い生涯を終えたが，彼女が願ったように，日記は生き残った。

いっぽう，オランダの泥まみれの野原を鉄条網で囲ったウェステルボルク収容所から，毎週一回，ポーランドの死の収容所へ向かう列車が発発した。オランダのユダヤ人女性エティ・ヒレスムは法学博士であり，自ら志願してこの地

に赴き、ユダヤ人評議会の職員となり、過酷な運命を強いられた人々に献身的な愛を注いだ。しかし、優れた古典学者の父、母、天才的なピアニストの弟、そして若くして新ビタミンを発見した別の弟と同様、生きて戻ることはなかった。

エティは、「どんな状況の元でも、人生から建設的なことを描き出せると思い」(34)、「もっとも困難な状況の元ですら、人間は生き続ける助けとなる新しい能力を生み出すことに気がつき」(128)、「難局を切り抜けていけるだけの内なる貯え」(145)としてユーモアを忘れない。彼女の残した日記や書簡は、生きる勇氣と希望を与えてくれる魂の記録である。

また、化学の分野で業績を上げたアダム・チャルニコフは、ナチに支配され不条理の世界と化したワルシャワ・ゲットーにおいて、ユダヤ人評議会議長に任命される。ナチは、評議会に強制労働や絶滅収容所に送る同胞を選別するよう命令し、ユダヤ人同士が憎み合うよう仕向けたのである。彼は、ナチに抵抗する地下組織の批判を受けながら、ゲットー内の経済活動、食糧供給、教育活動などの維持に努める。彼の日記(*The Warsaw Diary of Adam Czerniakow*)は、1939年9月6日から42年7月23日まで規則的につづられ、個人的な詳細や歴史的な出来事や状況評価を含み、当時を知る貴重な記録である。

およそ50万のユダヤ人が狭いゲットーに押し込められ、超過密、飢餓、伝染病の蔓延などによって戦争終結時までにはその99%が亡くなったという。この極限状況の中で、「日々の仕事をするのだ。泣き言をいっても始まらない」(22)と、チャルニコフは週7日働きづめであり、「神は8日目に安息日をくださらないものか」(126)とふと漏らす。正統派ユダヤ人が神の象徴と見なすあごひげがドイツ兵によって強制的に剃られたことを「愉快的遊び」(84)と譬え、シナゴークが焼かれても「それは神に心配していただく」(105)とかわし、強制的につけさせられた黄色い星の腕章によって「元帥」と誤解された逸話(115)を盛り込むなど、死に塗りこめられた環境で極力ユーモアを用いている。しかし、死の選別を任された評議会議長の苦悩は深く、最後は強制移送への協力を拒み、1942年7月23日、自らの命を絶つ。

結論

「隣人たちをユーモア感覚で扱うことで、共生の助けになっていく...ユダヤ人は何千年もの間、異なる隣人たちと暮らしてきた。その点でユダヤ人のユーモアは豊富なのである」(*The World's Best Jewish Jokes* 5)。以上見てきたように、ユダヤ人はユーモアを含んだ言語で世界を把握することで、厳しい生活をなんとか生きられる内容に変えようと努めてきたのではないか。

前島誠は『ユダヤ人 最高の知恵』において言う。「現実を踏まえてしっかりと立ち、同時に夢見ることもできる。そこに生じた現実と夢の落差を、ユーモアのセンスでやわらかく受け止める」(185)。「自分に降りかかる不測の出来事や相手の言葉を、固い心ではじき返してムキになるか、あるいはクッションですんなりと受け止めるか、すべては自分のユーモア感覚にかかっている」(185)。そして、「ユーモアとは、自分の失敗やみっともなさを、あっさりと笑い飛ばすゆとりである。自分の置かれた状況がどんなに気に入らないものであったとしても、それが事実であるならば、事実としてやわらかく受け止める姿勢なのだ」(192)と。

今後、多民族・多文化社会がますます増加し、それに伴って移民・難民問題も増え、生きる競争も激化するであろう。そうした状況において、苦難を生き延びてきたユダヤ人のユーモアが、より普遍的な意味を持って見直される時代が到来しているのではないか。

参考文献

- ベテルハイム，ブルーノー(丸山修吉訳)『鍛えられた心——強制収容所における心理と行動』法政大学出版局，1975。
ダルシマー，キャサリン(富山太佳夫，三好みゆき訳)『思春期の少女たち——文学にみる成熟過程』岩波書店，1989。
ヒレスム，エティ(大社淑子訳)『生きることの意味を求めて』晶文社，1989。
石原吉郎『望郷と海』筑摩書房，1972。
前島誠『ユダヤ人 最高の知恵』三笠書房，1994。
メンミ，アルベール(菊池昌実ほか訳)『イスラエルの神話』新評論，1983。
センブルン，ホルセ(榊原晃三訳)『なんと美しい日曜日！——ブーヘンワルト強制収容所・1944年冬』岩波書店，1986。
シーグフリード，アンドレ(鈴木一郎訳)『ユダヤの民と宗教』岩波新書，1967。

- 滝川義人『ユダヤを知る事典』東京堂出版, 1994.
- ロス, シーセル(長谷川眞, 安積鋭二訳)『ユダヤ人の歴史』みすず書房, 1966.
- Aleichem, Sholom. *Tevye's Daughters*. New York: Crown Publishers, 1949.
- . *Adventures of Mottel the Cantor's Son*. New York: Henry Schuman, 1953.
- . *Inside Kasrilevke*. New York: Schocken Books, 1965.
- . *Some Laughter, Some Tears*. New York: Paragon Books, 1968.
- . *The Adventures of Menahem-Mendl*. New York: Paragon Books, 1969.
- Antin, Mary. *The Promised Land*. New Jersey: Princeton UP, 1940.
- Ayalti, Hanan J. ed. *Yiddish Proverbs*. New York: Schocken Books, 1949.
- Bellow, Saul. *The Victim*. New York: The Vanguard Press, 1947.
- . ed. *Great Jewish Short Stories*. New York: Dell Publishing, 1963.
- . *Herzog*. New York: The Viking Press, 1964.
- . *Mr. Sammler's Planet*. New York: The Viking Press, 1970.
- Cahan, Abraham. *The Rise of David Levinsky*. New York: Harper & Row, 1917.
- . *Yekl and The Imported Bridegroom and Other Stories of Yiddish New York*. New York: Dover Publications, 1970.
- Cronin, Gloria L & Siegel, Ben eds. *Conversations with Saul Bellow*. Jackson: UP of Mississippi, 1994.
- Eliezer, Ben. *The World's Best Jewish Jokes*. London: Fontana, 1992.
- Frank, Anne. *The Diary of a Young Girl*. New York: Doubleday, 1995.
- Greenspan, Ezra. *The Schlemiel Comes to America*. New Jersey: The Scarecrow Press, 1983.
- Hilberg, Paul et.al. eds. *The Warsaw Diary of Adam Czerniakow*. New York: Stein and Day, 1979.
- Howe, Irving & Greenberg, Eliezer eds. *A Treasury of Yiddish Stories*. New York: Schocken Books, 1953.
- . *Yiddish Stories Old & New*. New York: Holiday House, 1974.
- Lipman, Steve. *Laughter in Hell—The Use of Humor during the Holocaust*. New Jersey: Jason Aronson Inc., 1991.
- Malamud, Bernard. *A New Life*. New York: Farrar, Straus & Cudahy, 1961.
- . *The Fixer*. Farrar, Straus & Giroux, 1966.
- . *Pictures of Fidelman: An Exhibition*. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1969.
- I. L. Peretz. *Selected Stories*. New York: Schocken Books, 1974.
- Pinsker, Sanford. *The Schlemiel as Metaphor*. Carbondale & Edwardsville: Southern Illinois UP, 1971.
- Rosten, Leo. *The Return of Hyman Kaplan*. New York: Harper & Row, 1959.
- . *The Education of Hyman Kaplan*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1965.
- . *The Joys of Yiddish*. New York: McGraw Hill, 1968.
- . *Hooray for Yiddish!*. New York: Simon & Schuster, 1982.
- Rubin, Louis D. Jr. ed. *The Comic Imagination in American Literature*. New Jersey: Rutgers UP, 1973.

- Sforim, Mendele Moykher. *Tales of Mendele the Book Peddler*. New York: Schocken Books, 1996.
- Singer, Isaac Bashevis. *Gimpel the Fool and Other Stories*. Farrar, Straus & Giroux, 1957.
- . *The Fools of Chelm and Their History*. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1973.
- . *Lost in America*. New York: Doubleday, 1981.
- Spalding, Henry D. ed. *Encyclopedia of Jewish Humor*. New York: Jonathan David Publishers, 1969.
- Stein, Joseph. *Fiddler on the Roof*. New York: Pocket Books, 1966.
- West, Nathanael. *The Collected Works of Nathanael West*. Middlesex: Penguin Books, 1975.

Jewish Humor and Laughter in Hell

Kazushige Sagawa

The secret of the survival of the Jewish people for ages when all other great races and empires which persecuted them have perished can be attributed to 1) the Torah and the Talmud which sustained them spiritually and gave them wisdom of life, 2) the preservation of the Sabbath which restored their persecuted spirits, and 3) their social system of mutual help and charitable organizations.

However, still another factor which contributed to Jewish survival has been their sense of humor which has helped them to maintain an equilibrium between their ideal of being a chosen people and the harsh reality of their political, economic, and social deprivation in many countries during the Diaspora.

Jewish humor can be categorized in many ways: as irony, tragic optimism, the intermingling of 'Is' and 'Ought,' self-mockery, the jokes of the schlemiel (a luckless person) who was born out of centuries of persecution and who eventually went to America, and the almost unbelievable humor of the Holocaust.

The humor that grew out of the Holocaust can be one of the greatest gifts God gave Jews to pull themselves out of despair, to fight oppression, to preserve their own sanity, and to help them—not physically, but emotionally—through the concentration camps.

During their wanderings for many thousand years Jews have found themselves to be neighbors of various countries, and jokes about their neighbors have helped them to live with them, so there are a lot of Jewish jokes.

In this day and age when our society is increasingly becoming multiracial and multicultural with its attendant frictions, stimuli and hope, it can be sug-

ユダヤ人のユーモア，ホロコーストのユーモア

gested that Jewish humor is acquiring more universal appeal to mankind struggling to live through the 21st century.